高　等　学　校

平成２６年度

教育研究員研究報告書

地理歴史

東京都教育委員会

目　次

Ⅰ　研究主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・ 1

Ⅱ　生徒の現状についての分析・・・・・・・・・・・ 1

Ⅲ　研究の視点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

Ⅳ　研究の仮説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

Ⅴ　研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

Ⅵ　研究の内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

Ⅶ　研究の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

Ⅷ　今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

研 究 主 題	**思考力・判断力・表現力等を育むための指導と評価の工夫改善**～時間軸・空間軸を重視した諸資料を活用して～

Ⅰ　研究主題設定の理由

今年度の教育研究員高校部会のテーマは「思考力・判断力・表現力等を育むための指導と評価」である。地理歴史科における思考力・判断力・表現力等の育成については、高等学校学習指導要領解説地理歴史編に、「年表、地図その他資料の活用を通して」、「知識基盤社会と言われる今日の社会の構造的変化に対応していくための思考力・判断力・表現力の育成を図る」と明確に記されている。さらに「時間軸と空間軸の両面から」現代世界への認識を深めるということが目標に記されており、地理歴史科は、歴史的なアプローチ（時間軸）と地理的なアプローチ（空間軸）から資料を精選・活用して思考力・判断力・表現力等を育成することが常に求められていることが分かる。

また、高等学校学習指導要領第１章第５款(12)には「指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かす」ことが記されており、指導と評価の改善は絶えず行われるべきものであり、思考力・判断力・表現力等を育成しつつ、更に指導と評価の工夫改善を進めていかなければならない。

こうした状況を踏まえ、平成 21 年に学習指導要領が改訂されて以降、東京都教育研究員地歴部会では学習指導要領に基づいた授業と評価の在り方について「思考力・判断力・表現力」の育成を一貫した軸として、時間軸と空間軸に関連する課題を設定した授業構成（平成 23 年度）、適切な評価基準の設定（平成 24 年度）、授業を活性化させる学習評価の工夫（平成 25 年度）を研究の対象とした。これらの先行研究において、資料を精選・活用して言語活動を取り入れた授業及び適切な規準に即した学習評価の実施が生徒の思考力・判断力・表現力等の育成に対して有効であることが明らかになったが、このような工夫された授業や評価は計画的・継続的に実施する必要があるという課題がみられた。

上述のとおり、時間軸・空間軸を重視した諸資料を精選・活用して思考力・判断力・表現力等を育成する指導方法や評価方法については常に工夫改善を加え、工夫改善された指導と評価は単独で完結させるのではなく、その後の学習指導を更に充実させることに結び付けなければならない。そこで、本部会では、研究主題を「思考力・判断力・表現力等を育むための指導と評価の工夫改善～時間軸・空間軸を重視した諸資料を活用して～」と設定した。

Ⅱ　生徒の現状についての分析

本部会では「思考力・判断力・表現力等を育む指導と評価」を研究していく上で生徒の実情を把握する必要があると考え、「世界史」、「日本史」、「地理」それぞれの科目で生徒の「思考力・判断力・表現力等を問う」テストを実施した。問題の内容と実施方法については、実施する学校の学習進度や学習内容の差異を考慮して、各科目で共通した問題を設定せず、各学校の学習内容に応じた「思考力・判断力・表現力等を問う」問題を作成し、各学校の定期考査を活用し

て実施した。

以下に各科目の出題の一例を掲載した。生徒の解答を分析して「思考力・判断力・表現力等」について、生徒が抱えている課題を把握する。

なお、紙面の都合で省略している図版や資料については、その内容が分かるように説明文を記載した。

１　世界史

帝政ローマについて、以下の文章を読み、各問に答えなさい。

全地中海の平定を成し遂げたオクタヴィアヌスは、前 27 年に a尊厳者の称号を授けられると、ローマの権力を一人で握って政治を行うようになった。ここに共和政の時代は終わり、帝政ローマが始まった。帝政ローマ開始後から約 200 年間は、ローマの国力も強く、そのおかげで地中海世界は b平和な時代を迎えた。（以下略）

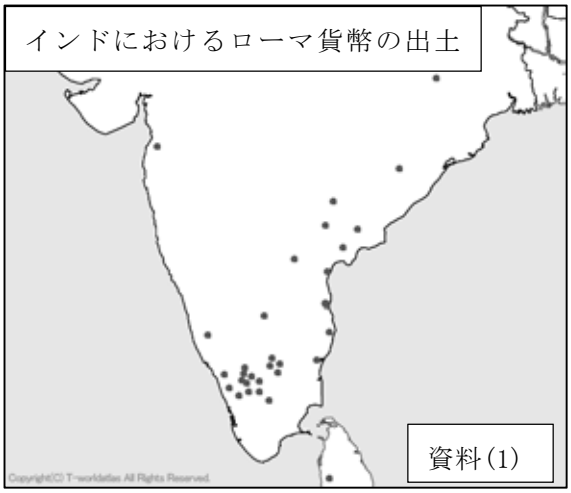
問２　下線部ｂについて、以下の各問に答えなさい。

（中略）

②資料(1)は「インドにおけるローマ貨幣の出土地」、資料(2)は２世紀の世界」をそれぞれ示している。二つの資料から当時のインドとローマの間にどのような関係があったか、資料から分かることに基づいて説明しなさい。

資料(2)

２世紀のユーラシア大陸の勢力図（ローマ帝国、パルティア、後漢など）にインド洋の季節風の風向きを加えた地図



（世界地図　http://www.sekaichizu.jp/　より作成）

資料(1)から「南インドに貨幣が多く出土していることから、ローマとインドの間に北からの陸上交通ではなく南からの海上交通を利用した貿易があったこと」、資料(2)から「海上の移動に季節風が利用されたこと」をそれぞれ読み取り、これらを考察して「ローマとインドの間に季節風を利用した海上貿易が行われていた」という内容の解答ができた生徒は、全体の 19.1%であり、一方の資料にのみ依拠して解答した生徒は 30.7%であった。また、30.7%の生徒が単語やごく短い文章で解答している。

２　日本史

以下の【資料Ａ】は，朝鮮開国のきっかけとなった条約の第一款，そして日清戦争の講和条約の第一条である。また，資料Ｂは日清戦争に関する国際情勢を風刺した絵画である。この二つの資料から読み取ることができる日本の意図を，当時の東アジア情勢を踏まえて解答しなさい。

【資料Ａ】
○朝鮮開国のきっかけとなった条約
・第一款　朝鮮國ハ自主ノ邦ニシテ日本國ト平等ノ權ヲ保有セリ（後略）
（現代語訳　朝鮮国は独立国であり、日本国と同様の権利を保有している）
○日清戦争の講和条約
・第一條　清國ハ朝鮮國ノ完全無欠ナル獨立自主ノ國タルコトヲ確認ス（後略）
（現代語訳　清は朝鮮が完全に自主独立している国であることを確認するものである）

【資料Ｂ】
『トバエ』1887 年 2 月 15 日掲載「魚釣り遊び」ビゴー筆
魚（朝鮮）を釣り上げようとしている日清とそれをうかがっているロシアの図

【資料Ａ】から「朝鮮を独立国とすること」、【資料Ｂ】から「朝鮮を日本・清・ロシアの３国が影響下に置こうとしていること」をそれぞれ読み取り、それらを結び付けて考察し、「日本は朝鮮を清から独立させ、自らの影響下に置いて、南下政策をとるロシアに対する防波堤にしようとした」という日本の意図を導き出せた生徒は、全体の 16.8％であったが、それに対してどちらか一方の資料にのみに基づいて解答した生徒が 37.1％であった。また、二つの資料から読み取り、考察しようとしているが、論述が不十分な生徒は 20.3％であった。

３　地理

ある鉱産資源について次の諸資料を参照し、以下の各問に答えなさい。

表１

	産出（万トン、2010）		輸出（万トン、2010）		輸入（万トン、2010）	
１位	中国	323500	オーストラリア	29262	日本	18537
２位	インド	53269	インドネシア	29106	中国	16310
３位	アメリカ合衆国	45767	ロシア	13228	韓国	11350
４位	インドネシア	31919	コロンビア	6815	インド	6892
５位	オーストラリア	31426	アメリカ合衆国	6711	ドイツ	4573

（『Data Book of The World 2014』（二宮書店）より作成）

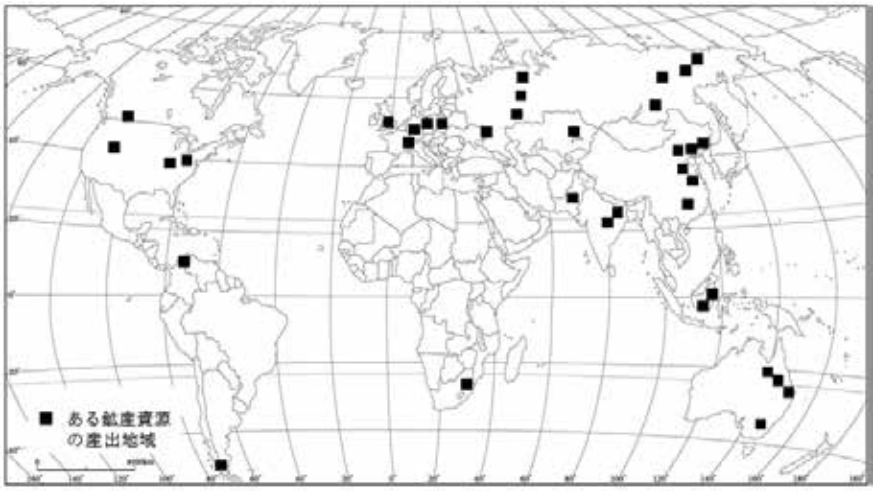


図５　（『新詳高等地図』（帝国書院）より作成）

写真１
露天掘りを表す写真。ある鉱産資源を採掘している様子。大型機械を用いて地表から直接掘っていく。

問１　この鉱産資源の名称を答えなさい。
問２　問１の判断理由を述べなさい。また、表１において、アメリカ合衆国やオーストラリアにおけるこの鉱産資源の産出量が多い理由を、提示されている資料をもとに 200 字以内で説明しなさい。

問２について、図５から「■が、古期造山帯と重なる位置に分布していること」を読み取り「石炭」であると判断する。アメリカ合衆国・オーストラリアの産出については、古期造山帯である「アパラチア山脈やグレートディヴァイディング山脈が位置しているからということ」を自らの知識として導き出す。写真１は露天掘りであり、「産出量が多い理由として露天掘りの利点」に着目することが求められる。それぞれの資料を活用できた生徒は、図５で 54.8%、写真１で 36.9%であった。これらを関連させ十分な解答ができた生徒は全体の 16.7%であり、また、文字数が足りずに減点される生徒は 55%であった。

４　結果の分析

生徒の解答を分析した結果、報告書に掲載していない問題も含めて完答できた生徒は全体の約３割で、複数の資料から情報を読み取り、それらを結び付けて自らの考えをまとめることができる生徒が少ないことが分かった。また、資料などの情報を読み取れていても、それを文章にまとめることができない生徒や単語の羅列や短い文章で解答してしまう生徒の数も少なくなかった。

これらをまとめると「思考力・判断力・表現力等」についての生徒の現状は以下の２点である。

①複数の資料から情報を読み取り、関連付ける力が十分ではない

②自らの考えを文章にまとめる力が十分ではない

①・②の課題を解決するために、昨年度までの先行研究の成果と課題を踏まえて、本部会では更に生徒の思考力・判断力・表現力等が高まる指導と評価の在り方に関して研究の仮説・手法を検討した。

Ⅲ　研究の視点

生徒の現状を分析した結果、明らかとなった課題を解決するため、本部会では、複数の資料から情報を読み取り、読み取った内容を根拠に自らの考えをまとめ、表現する力を育む指導と評価の在り方について研究を行った。

まず、昨年度までの地理歴史部会の先行研究からも明らかなとおり、時間軸（歴史的なアプローチを通じて得られる視点）・空間軸（地理的なアプローチを通じて得られる視点）の両面から考察することは、他教科にはない地理歴史科の特性である。本部会においても、昨年度まで

の地理歴史部会の研究と同様に、時間軸・空間軸を重視した複数の資料を活用して、生徒に多面的・多角的な考察を促す学習指導を行う。

次に、生徒が諸資料から読み取った内容を根拠に自らの考えをまとめ、表現する力を育むためには、個々の生徒の学習状況を把握し、適切な指導を行うことが必要である。本部会では、平成 25 年度の地理歴史部会の研究に引き続き、生徒一人一人の学習到達状況を把握し、より充実した学習指導を行うため、評価規準に基づいた定量的指標としてルーブリックを活用した。ルーブリックを活用して生徒の学習活動を評価することで、次の学習指導を改善し、更に新しい学習指導の成果を再度評価することで、指導と評価の工夫改善を継続的に図ることができると考えた。

また、本部会では、ルーブリックを活用して思考力・判断力・表現力等を評価するに当たって、昨年度までの評価基準である「考察に活用した資料の数」に加え、資料から読み取れた情報と、これまでの経験や学習等から得た「自らの知識」とを関連付け、自らの考えをまとめ、表現することを評価するため、以下に示すとおり、新たに一段階増やした四段階の評価基準を作成・提示して、学習活動に取り組ませることとした。

評価規準	評価基準			
	A 十分満足できる	B 概ね満足できる	C 努力を要する	D 特に努力を要する
諸資料から読み取れた内容と自らの知識とを関連付けて根拠としルーブリックを活用した指導を受け、自らの考えをまとめ、表現することができる。	諸資料から読み取れた内容と自らの知識を関連付け、複数の根拠を基に自らの考えをまとめ、表現することができる。	資料から読み取れた内容と自らの知識を関連付け、根拠を基に自らの考えをまとめ、表現することができる。	諸資料から読み取れた内容を根拠に、自らの考えをまとめ、表現することができる。	資料から読み取れた内容を基に自らの考えをまとめ、表現することができる。

新たに作成した四段階の評価基準を有効に活用するため、本部会は「問い」の重要性に着目し、「問い」についても研究した。授業で生徒が思考し、判断し、表現するためには、ただ諸資料を準備するだけではなく、授業のねらいに即し、資料と正対し、生徒に考察を促す適切な「問い」が必要である。さらに、単元全体を貫く「基軸となる問い」を設定し、１時間ごとの授業のねらいに即した「小さな問い」を作成する。それぞれの授業での「小さな問い」の考察を通して順次「基軸となる問い」を深めていくことから、授業のねらいに即した「小さな問い」と単元を貫く「基軸となる問い」についての関わりについても研究を行った。

本部会では、「思考力・判断力・表現力等を育むための指導と評価の工夫改善」を行うために、具体的に以下の取組を行う。

まず各部員が定期試験の際、担当科目の試験問題に、思考力・判断力・表現力等を問う問題を設定して取り組ませることで、生徒の現状を把握する。次にその結果を踏まえて、科目ごとに単元の「基軸となる問い」と各授業のねらいを設定し、検証授業で実施する単元指導計画を作成する。時間軸・空間軸を重視した諸資料の作成と「基軸となる問い」を深める、ねらいに即した「小さな問い」を設定する。思考力・判断力・表現力等を育成するためにルーブリックを用いて作成した四段階の評価基準を活用した検証授業を行い、生徒のワークシートやアンケートの分析を通じて、思考力・判断力・表現力等が育成できたか検証し、今後授業を改善のための具体的方向性や方針についてまとめる。

Ⅳ　研究の仮説

以下の３点の仮説を立てて授業と評価の工夫を行い、検証した。

1　時間軸・空間軸を重視した諸資料を読み取るスキルを高めるとともに、諸資料から読み取れた内容と、自らの知識とを関連付けて考察・判断し、論理的に表現する学習活動を充実させることで、生徒の思考力・判断力・表現力等を育むことができる。

2　思考力・判断力・表現力等を高めるための評価規準に基づき、具体的かつ適切な評価基準を設定し、生徒に提示することで、生徒は学習活動の目標をもち、効果的に学習活動に取り組むことができる。

3　評価基準を活用して、生徒の学習到達状況を適切に把握することで、授業を改善することができる。

Ⅴ　研究の方法

1　具体的方策

以下の３点を取り入れた授業と評価を行い、その後、成果と課題をまとめた。

(1)　時間軸・空間軸を重視した諸資料とねらいに即した問いを提示し､諸資料から読み取れた内容と､自らの知識とを関連付けて考察･判断し､論理的に表現する学習活動を行う。

(2)　評価規準に基づき、定量的指標としてルーブリックを用いて、思考力・判断力・表現力等に関する評価基準を設定・提示して、学習活動に取り組ませる。

(3)　評価結果を分析し､生徒の学習到達状況を把握して､指導の改善のための具体的方向性や方針を作成する。

2　各科目における指導案の作成及び検証授業・評価

実践事例では、具体的方策で述べた３点を踏まえて指導案を作成し、検証授業を行った。その上で、ワークシートやペーパーテストなどにより評価・分析を行い、次の３点を中心に成果と課題をまとめる。

(1)　時間軸・空間軸を重視した諸資料を読み取らせ、思考力・判断力・表現力等が育むことができたかを、ワークシートなどから検証する。

(2)　ルーブリックを用いた評価基準が生徒に学習の目標を与え､学習に効果的に取り組ませるものであったのかを、ワークシートやアンケートなどから検証する。

(3)　評価結果を分析し､生徒の学習到達状況を把握して､指導の改善のための具体的な方策を作成することができたか確認する。

Ⅵ　研究の内容

1　研究構想

全体テーマ　**「思考力・判断力・表現力等を高めるための授業改善」**

高校部会テーマ　**「思考力・判断力・表現力等を育むための指導と評価」**

現状と課題（生徒の思考力･判断力･表現力等についての現状を分析し、課題を抽出する）

【現状】

○授業では社会的事象に関する知識の習得に重点が置かれ、諸資料を活用する力や思考力・判断力・表現力等の育成が十分になされていない。

○思考力・判断力・表現力等を評価する規準の検討・活用が十分ではない。

○思考力・判断力・表現力等を育むための指導の工夫改善が十分ではない。

【課題】

○諸資料を読み取るスキルを高めるとともに、諸資料から読み取れた内容と、自らの知識とを関連付けて考察・判断し、論理的に表現する学習活動を充実させることで、生徒の思考力・判断力・表現力等を育む必要がある。

○学習効果を高めるために、思考力・判断力・表現力等の評価規準とそれに即した評価基準を明確に設定する必要がある。

○設定した評価規準及び評価基準を活用して、授業の工夫改善を図る必要がある。

地理歴史部会主題

思考力・判断力・表現力等を育むための指導と評価の工夫改善
～時間軸・空間軸を重視した諸資料を活用して～

仮説

○時間軸・空間軸を重視した諸資料を読み取るスキルを高めるとともに、諸資料から読み取れた内容と、自らの知識とを関連付けて考察・判断し、論理的に表現する学習活動を充実させることで、生徒の思考力・判断力・表現力等を育むことができる。

○思考力・判断力・表現力等を高めるための評価規準に基づき、具体的かつ適切な評価基準を設定し、生徒に提示することで、生徒は学習活動の目標をもち、効果的に学習活動に取り組むことができる。

○評価基準を活用して、生徒の学習到達状況を適切に把握することで、授業を改善することができる。

具体的方策

○時間軸・空間軸を重視した諸資料とねらいに即した問いを提示し、諸資料から読み取れた内容と、自らの知識とを関連付けて考察・判断し、論理的に表現する学習活動を行う。

○評価規準に基づき、定量的指標としてルーブリックを用いて、思考力・判断力・表現力等に関する評価基準を設定・提示して、学習活動に取り組ませる。

○評価結果を分析し、生徒の学習到達状況を把握して、指導の改善のための具体的方向性や方針を作成する。

評価･検証

○時間軸・空間軸を重視した諸資料を読み取らせ、思考力・判断力・表現力等が育むことができたかを、ワークシートなどから検証する。

○ルーブリックを用いた評価基準が生徒に学習の目標を与え、学習に効果的に取り組ませるものであったのかを、ワークシートやアンケートなどから検証する。

○評価結果を分析し、生徒の学習到達状況を把握して、指導の改善のための具体的な方策を作成することができたか確認する。

２ 実践事例Ⅰ　世界史

教科名	地理歴史	科目名	世界史Ｂ	学年	第２学年

(1)　単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア　単元名　　古代ローマ世界

イ　使用教材　『詳説世界史Ｂ』（山川出版社）　『アカデミア世界史』（浜島書店）

(2)　単元（題材）の指導目標

ア　古代ローマ世界の形成・拡大から分裂・崩壊にいたるまでの過程について政治・経済・文化などの諸側面から、地中海世界に与えた影響を考察させる。

イ　現代世界にも影響を与えているローマの諸文化及び都市文化、社会生活の特色について諸資料を活用して考察させる。

(3)　単元（題材）の評価規準

ア　関心・意欲・態度	イ　思考・判断・表現	ウ　資料活用の技能	エ　知識・理解
・古代ローマ世界の形成や政治体制、文化的特色や諸地域と相互に影響しあってきたことに対する関心を高め、意欲的に追究しようとしている。	・古代ローマ世界の形成や政治体制、文化的特色を多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	・古代ローマ世界の形成や政治体制、文化的特色に関する諸資料を活用して、時間的・空間的な視点を重視し、因果関係を考察している。	・古代ローマ世界の形成や政治体制、文化的特色についての基本的な事柄を把握し、その知識を身に付けている。

(4)　単元（題材）の指導と評価の計画（６時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点				評価規準（評価方法など）
		関	思	技	知	
【基軸となる問い】古代ローマは地中海世界にどのような影響を与えたか。						
第一次	【ねらい】ローマの政治体制の形成と領土拡大について理解させる。 【小さな問い】ローマ共和政とアテネ民主政の違いは何か。					
	・ローマ共和政の構造図とアテネ民主政の構造図を比較し、両者の違いを考察してワークシートにまとめる。	●				・アテネ民主政とは異なり、ローマ共和政では貴族と平民の身分闘争後も貴族支配の性格が強かったことを構造図から読み取っている。（ワークシート記述）
	・イタリア半島の統一からポエニ戦争までの領土拡大について理解する。				●	・イタリア半島での分割統治と属州統治の目的やその違いを理解している。（ワークシート記述・発問）
第二次	【ねらい】ポエニ戦争後から内乱の一世紀収束までのローマの政治・社会の変化について理解させる。 【小さな問い】ラティフンディアはなぜ成立し、どのような影響を与えたか。					
	・ラティフンディアの形成・発展からポエニ戦争後のローマの社会の変化について考察する。			●		・諸資料からラティフンディアの形成・発展による大土地経営は中小農民にどのような影響を与えたか考察している。（ワークシート記述）
	・内乱の一世紀が始まった理由とその結果について理解する。				●	・ローマ社会の変化が貧富の差や内部抗争を引き起こしたことを理解している。（ワークシート記述・発問）
第三次（本時）	【ねらい】パクス＝ロマーナ期のローマ帝国の経済的繁栄について考察させる。 【小さな問い】ローマ帝国はなぜ経済的に繁栄できたのか。					
	・ローマ帝国が経済的に繁栄した理由や背景について諸資料を活用し、考察したことをワークシートに記述する。		●			・資料から支配地の拡大と地中海世界の物産がローマに流入していることを読み取り、自らの考えをまとめ、表現している。（ワークシート記述）

第四次	【ねらい】ローマ帝国の政治体制の変化を理解させ、分割統治が行われた背景や理由について考察させる。 【小さな問い】ローマ帝国が分割統治を行なったのはなぜか。					
	・軍人皇帝時代やドミナトゥスなど帝政ローマ後期の特徴をワークシートにまとめる。 ・帝国において分割統治が行われた背景や理由、その影響について諸資料を活用し、考察してワークシートに記述する。		●		●	・資料を読み取り、元首政と専制君主政の違いを理解し、まとめる。（ワークシート記述） ・諸資料から帝国の衰退や異民族の侵入等を読み取り、自らの考えをまとめ、表現している。（ワークシート記述）
第五次	【ねらい】建造物を中心にローマ文化の特徴について考察させる。 【小さな問い】ローマではなぜ大規模な建造物が建てられたのか。					
	・ギリシア文化とローマ文化の相違について、ローマはなぜ建造物の遺産が多いのか、ワークシートに記述する。		●			・ローマ時代の建造物とギリシア文化の比較から、ローマ文化の特徴について自分の考えをまとめ、表現している。（ワークシート記述）
第六次	【ねらい】ローマにおけるキリスト教の迫害と受容の歴史について理解させる。 【小さな問い】キリスト教はなぜローマ帝国に受け入れられたのか。					
	・なぜ多神教世界のローマがキリスト教を弾圧したのか、一神教であるキリスト教の特徴を考察し、ワークシートに記述する。		●			・一神教のキリスト教が迫害された理由について、資料をもとに、自らの考えを表現している（ワークシート記述）
	・コンスタンティヌス帝とユリアヌス帝の主張を比較し、宗教と人のかかわりについて理解する。				●	・拡大するキリスト教に対する二人の皇帝の政策を理解している。（ワークシート記述）

(5)　本時（全６時間中の３時間目）

ア　本時の目標

時間軸・空間軸を重視した諸資料を読み取り、ローマ帝国が経済的に繁栄した理由や背景について考察し、自分の考えを表現する。

イ　本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法 （ア～エ）
導入	15分	・これまでの古代ローマの歴史を振り返る。 ・提示された小麦の無料配給所の画像から古代ローマ人の生活について考察する。 ○「何をしている画像なのか。」 ○「どんな人が、誰を対象に配給しているのか。」	・本時の目標や授業内容やを理解させ、学習の動機を付けさせる。 ・古代ローマの小麦の無料配給所の画像を提示し、その対象者や目的を考察させる。 ・ワークシートを配布する。	・本時の目標を理解し、意欲的に課題に取り組む姿勢をもっている。（ア・観察・机間指導） ・資料から古代ローマ人の生活について考察している。（ウ・ワークシート記述）
展開	30分	・古代ローマの「パンと見世物」について理解した上で、「パン」について考察する。 発問「ローマ帝国はなぜ経済的に繁栄できたのか。」 ・古代ローマにおいてパン（小麦）を有力政治家が配給できた理由を、ローマの発展・拡大と関連付け、二つの資料を活用してワークシートに記述する。	・「パン」及び「見世物」がそれぞれ何を意味しているかについて説明した上で、発問する。 ・ルーブリックの評価基準について説明し、各資料の意図を読み取って考察・記述するように指導する。 ・机間指導を行い、生徒の活動状況を把握する。必要に応じて、資料活用の助言をする。	・諸資料から支配地の拡大と地中海世界の物産がローマに流入していることを読み取り、自らの知識と関連付けて考察し、自分の考えをまとめ、表現することができている。（イ・ワークシート記述）
まとめ	5分	・ワークシートを提出して本時の諸資料の着目点についての説明を聞く。 ・本時を振り返り、学習の成果や感想をアンケート用紙に記入する。	・各資料の読み取るべきポイントを解説する。 ・本時の取組を自己評価させる。	・本時の理解度や自身の取組について自己評価している。（ア・アンケート記述）

ウ　評価の実際

評価規準	評価基準			
	A （十分満足できる）	B （概ね満足できる）	C （努力を要する）	D （特に努力を要する）
諸資料から支配地の拡大と地中海世界の物産がローマに流入していることを読み取り、自らの知識と関連付けて考察し、自分の考えをまとめ、表現することができている。	シチリアやエジプトなどを獲得し、領土拡張したことが表記されている年表（時間軸）とそれらの領土から小麦が流入する地図（空間軸）の諸資料と自らの知識を関連付け、有力政治家が穀物を配給できた理由について、根拠を明示した上で自分の考えをまとめ、表現することができている。	シチリアやエジプトなどを獲得し、領土拡張したことが表記されている年表（時間軸）又はそれらの領土から小麦が流入する地図（空間軸）の資料と自らの知識を関連付け、有力政治家が穀物を配給できた理由について、根拠を明示した上で自分の考えをまとめ、表現することができている。	シチリアやエジプトなどを獲得し、領土拡張したことが表記されている年表（時間軸）とそれらの領土から小麦が流入する地図（空間軸）の諸資料の内容を根拠にし、有力政治家が穀物を配給できた理由について、自分の考えをまとめ、表現することができている。	シチリアやエジプトなどを獲得し、領土拡張したことが表記されている年表（時間軸）又はそれらの領土から小麦が流入する地図（空間軸）の資料を根拠にして、有力政治家が穀物を配給できた理由について、自分の考えをまとめ、表現することができている。

(6)　問いの設定理由

本単元の基軸となる問いの「古代ローマが地中海世界に与えた影響」と本時の問いの「ローマ帝国の経済的繁栄の理由」を関連させた上で、考察させるための問いを検討した。検討の結果、題材に用いたのが「パンと見世物」の「パン」で、有力政治家が小麦を市民に配給できた理由を生徒に考察させつつ、ローマ帝国の地中海世界での影響力及び経済的繁栄を理解させる問いを設定した。

考察させるための資料は二つで、「時間軸を重視した資料」は、古代ローマがシチリアやエジプトなどを獲得し、領土拡張の変遷などを表記した略年表を提示した。そして「空間軸を重視した資料」は、２世紀前半のローマ帝国の領域と各地の主産物や交易路を表記した地図を提示した。

(7)　本時の振り返り

ア　ルーブリックによる評価結果（生徒数 39 名）

A（十分満足できる）	B（概ね満足できる）	C（努力を要する）	D（特に努力を要する）
８人（20.5%）	13 人（33.3%）	12 人（30.8%）	６人（15.4%）

イ　アンケートの結果（生徒数 39 名）

質問項目	あてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
①あなたは資料を活用して考察することができましたか。	16 人 （41.0%）	19 人 （48.7%）	３人 （7.7%）	１人 （2.6%）
②あなたは根拠を挙げて判断をすることができましたか。	６人 （15.4%）	11 人 （28.2%）	20 人 （51.3%）	２人 （5.1%）
③あなたは自分の言葉で表現をすることができましたか。	５人 （12.8%）	18 人 （46.2%）	13 人 （33.3%）	３人 （7.7%）
④あなたは評価を提示されたことで意欲的に学習することができましたか。	10 人 （25.7%）	19 人 （48.7%）	９人 （23%）	１人 （2.6%）

ウ　仮説の検証

(ｱ)　仮説１の検証

アンケート①の結果、35 名（全体の 89.7%）の生徒が「資料を活用して考察すること」ができたと回答しており、思考力を育むことはできた。

一方、アンケート②の結果から、「根拠を挙げて判断すること」の学習活動を苦手としている生徒が多く、またルーブリックの評価結果から評価Ｃ・Ｄの生徒は合わせて 18 名（全体の 46.2%）となり、指導方法を改善し、諸資料を読み取り、思考力・判断力・表現力等を育成する授業を継続的に行う必要があることが分かった。

(ｲ)　仮説２の検証

アンケート④の結果､74.4%の生徒がルーブリックの評価基準を提示することによって、意欲的に学習できたと答えている。生徒によっては評価基準のＡを満たしているかを確認するため、自らの解答にチェックマークを書き込むなど、ワークシートから学習への意欲が向上したことがみられた。

(ｳ)　仮説３の検証

学習理解度の確認やつまずきやすい点など生徒の学習到達状況をワークシート及び授業中の机間指導から把握することができた。特にワークシートからは生徒の理解度の確認だけではなく、弱点の把握など次回の授業で重点的に解説する点や指導すべき点などを検討することができた。

エ　成果と課題

(ｱ)　成果

第一に、時間軸・空間軸を重視した諸資料を活用する問いに取り組ませることで、生徒の知的好奇心や興味、関心を喚起し、思考力・判断力・表現力等を育むことができた。アンケートからも諸資料の活用や問いへの取組に対して、前向きな意見が多かった。

第二に、授業やワークシートの取組から生徒の思考力・判断力・表現力等の現状を理解し、個に応じた指導や今後の授業の指導方針が見えてきた。特に評価基準の「努力を要する」「特に努力を要する」生徒を把握し、速やかに指導・助言することで、資料の読み取り方を理解させ、授業に取り組む意欲を高められた。

第三に、生徒へルーブリックを提示したことで資料の読み取りから表現するまでのプロセスが明確となり、生徒がより高い評価を目指すために学習意欲の向上につながった。

(ｲ)　課題

第一に、アンケートの結果、文章で表現することに苦手意識をもっている生徒が多いことが分かった。それに対する方策として、問いの解答を導き出すためのスモールステップを設けることが考えられる。

第二に、ルーブリックを提示したものの、評価基準の文章表現が生徒にとっては分かりにくいという意見が多かった。提示の際には各評価基準の文章表現を分かりやすいものとし、具体例を挙げるなど丁寧に生徒へ解説する必要がある。

第三に、ルーブリックで表記した「自らの知識」という部分に疑問や難しさを感じている生徒が多くいた。「自らの知識」とは授業で得た知識又は社会生活から得た知識なのか明確な定義付けをして生徒へ説明することが必要である。

３ 実践事例Ⅱ　日本史

教科名	地理歴史	科目名	日本史Ａ	学年	第１学年

(1)　単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア　単元名　　自由民権運動の展開

イ　使用教材　『現代の日本史』（山川出版社）　『新詳日本史』（浜島書店）

(2)　単元（題材）の指導目標

ア　士族反乱や在野勢力による政府批判運動の経過を理解させ、議会開設に向けた政府の動きと立憲制の導入や議会開設に与えた影響について、諸資料を活用して考察させる。

イ　政府へ向けられた批判の内容を、当時の思想や社会背景、経済状況など多面的・多角的に考察させる。

(3)　単元（題材）の評価規準

ア　関心・意欲・態度	イ　思考・判断・表現	ウ　資料活用の技能	エ　知識・理解
・自由民権運動と立憲体制の成立過程及び社会や文化の特色に対する関心と課題意識を高め、意欲的に追究している。	・自由民権運動と立憲体制の成立過程及び社会や文化の特色から課題を見いだし、国際環境と関連付けて多面的・多角的に考察するとともに、国際社会の変化を踏まえ公正に判断して、その過程や結果を適切に表現している。	・自由民権運動と立憲体制の成立過程及び社会や文化の特色に関する諸資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめたりしている。	・自由民権運動と立憲体制の成立過程についての基本的な事柄を、社会や国際環境の変化と関連付けて総合的に理解し、その知識を身に付けている。

(4)　単元（題材）の指導と評価の計画（３時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点 関	思	技	知	評価規準（評価方法など）
【基軸となる問い】自由民権運動はなぜ発生し、どのように変容していったのか。						
第一次（本時）	【ねらい】諸資料を活用して民撰議院設立建白書が提出された歴史的背景について考察させる。 【小さな問い】民撰議院設立建白書はなぜ提出されたのか。 ・自由民権運動がおこった歴史的背景について諸資料を活用して表現する。 ・板垣退助たちが民撰議院設立建白書を提出した理由について、諸資料を踏まえて考察して表現する。		● ●			・諸資料から読み取った情報を根拠とし、自らの考えをまとめ、表現している。（ワークシート記述） ・民権派の思惑について諸資料を活用して考察し、自らの考えをまとめ、表現している。（ワークシート記述）
第二次	【ねらい】明治十四年の政変が発生した背景と民権運動に与えた影響を考察させるとともに、各政党の特徴について理解させる。 【小さな問い】明治十四年の政変や政党活動が自由民権運動にどのような影響を与えたか。 ・中江兆民等の思想家や言論界の活発な活動が民権運動を支えたということを多面的・多角的に考察して表現する。 ・政府内における大隈重信と伊藤博文の対立等も考慮し、明治十四年の政変が自由民権運動に与えた影響について考察する。		●		●	・諸資料の情報を関連付け根拠とし、ルーブリックを活用して指導を受け、自らの考えをまとめ、表現している。（ワークシート記述） ・明治十四年の政変について、諸資料を活用して理解した上で、世論や民権運動に与えた影響を考察している。（ワークシート記述）

第三次	【ねらい】松方財政による不況と相次ぐ激化事件が民権運動の挫折や衰退につながったことを理解させる。 【小さな問い】松方財政や激化事件によって自由民権運動はどのような状況に陥ったか。					
	・松方財政により発生した不況が民権派の運動資金の窮乏につながり、民権運動の衰退を招いたことを理解する。 ・1882 年から 84 年にかけて東日本で発生した激化事件の特徴について多面的・多角的に考察した上でワークシートにまとめる。	●			●	・農村に不況が広まった理由を考察し、農村の窮迫が民権運動に打撃を与えたことを理解している。（ワークシート記述） ・諸資料から情報を正確に読み取り、それぞれの激化事件の特徴を整理している。（ワークシート記述）

(5)　本時（全３時間中の１時間目）

ア　本時の目標

(ｱ)　自由民権運動が何を目指し、どのように展開したのかを説明できる。

(ｲ)　民撰議院設立建白書の提出に至るまでの歴史的背景について、その根拠となる諸資料を読み取り、自らの知識と関連付け、藩閥の勢力分布（空間軸）と明治六年の政変に至るまでの経過（時間軸）を意識して考察し、自分の考えを表現できる。

イ　本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法（ア～エ）
導入	10分	・ルーブリックの評価規準の説明を聞く。 ・本時の目的を理解する。「諸資料を参考にしながら、なぜ自由民権運動が起こったのか、歴史的背景を考えて表現してみよう。」	・学習動機を形成する。ルーブリックを黒板に提示し、生徒の学習意欲の向上につなげる。 ・ワークシート（ＩＣＴ機器）を活用し、明治政府の政策等、既習事項を発問しながら確認する。	・本時の目的を理解し、意欲的に課題に取り組む姿勢をもっている。（ア・観察・机間指導）
展開	35分	・資料１を読み取り、征韓論争でたもとを分かつ以前の新政府メンバーの特徴について、空間軸（藩閥の勢力分布）の視点から考察し、自らの考えをワークシートに記入する。 ・資料２を読み取り、新政府がたもとを分かつ理由について、時間軸（明治六年の政変に至るまでの経過）の視点から考察し、自らの考えをワークシートに記入する。 発問「民撰議院設立建白書はなぜ提出されたのか。」 ・自由民権運動の出発点となった民撰議院設立建白書（1874 年１月提出）を読み、板垣退助たちがこの建白書を提出した理由について資料１と２を活用し、自らの考えをまとめ、ワークシートに記述する。	・ＩＣＴ機器を活用し、各資料を解説し、理解を促す。 ・机間指導を行い、生徒の取組状況を把握する。記入が進まない生徒に対して、助言し考察を促す。 ・資料１と資料２の考察を踏まえたスモールステップを意識させ、解答欄に記入する前に、箇条書きをさせるなどの指導を行う。併せて建白書の資料の補足説明をする。	・民撰議院設立建白書の提出に至るまでの歴史的背景について、その根拠となる事柄を記した諸資料を読み取り、そこから得た情報を自らの知識と関連付けて考察し、自らの考えをまとめ、表現している。（イ・ワークシート記述）
まとめ	5分	・ワークシートを提出して本時の諸資料の着目点についての説明を聞く。 ・本時の学習について、アンケートに記入しながら振り返る。	・ワークシート回収後、ＩＣＴ機器等を用いて本時の学習のポイントを指摘する。 ・アンケートを通じて、学習課題に取組過程で到達すべき目標に近付いていることを確認させる。	・本時の理解度や自身の取組について自己評価している。（ア・アンケート記述）

ウ　評価の実際

評価規準	評価基準			
	A （十分満足できる）	B （概ね満足できる）	C （努力を要する）	D （特に努力を要する）
民撰議院設立建白書の提出に至るまでの歴史的背景について、その根拠となる事柄を記した諸資料を読み取り、そこから得た情報を自らの知識と関連付けて根拠とし、自らの考えをまとめ、表現することができる。	藩閥の勢力分布（空間軸）と明治六年の政変以前の外交年表（時間軸）の諸資料と自らの知識を関連付け、板垣退助たちが民撰議院設立建白書を提出した理由について、根拠を明示した上で自らの考えをまとめ、表現することができる。	藩閥の勢力分布（空間軸）又は明治六年の政変以前の外交年表（時間軸）の資料と自らの知識を関連付け、板垣退助たちが民撰議院設立建白書を提出した理由について、根拠を明示した上で自らの考えをまとめ、表現することができる。	藩閥の勢力分布（空間軸）と明治六年の政変以前の外交年表（時間軸）の諸資料を根拠にして、板垣退助たちが民撰議院設立建白書を提出した理由について、自らの考えをまとめ、表現することができる。	藩閥の勢力分布（空間軸）又は明治六年の政変以前の外交年表（時間軸）の資料を根拠にして、板垣退助たちが民撰議院設立建白書を提出した理由について、自らの考えをまとめ、表現することができる。

(6)　問いの設定理由

本単元では自由民権運動と立憲体制の成立過程について考察させる。その際「自由民権運動はなぜ発生し、どのように変容していったのか」という基軸となる問いを設定し、近代国家が成立する過程を時間軸・空間軸を重視した諸資料を活用し、多角的に考察させながら歴史的思考力を育む。

本時では「民撰議院設立建白書はなぜ提出されたのか」という問いを設定し、藩閥政府の勢力分布を示した日本地図を空間軸の資料、明治六年の政変以前の外交に関する年表を時間軸の資料とした。これらの諸資料と自らの知識を活用して、民撰議院設立建白書が提出された理由についてスモールステップを踏みながら思考・判断させる問いを設定した。

(7)　本時の振り返り

ア　ルーブリックによる評価結果（生徒数 38 名）

A（十分満足できる）	B（概ね満足できる）	C（努力を要する）	D（特に努力を要する）
7 人（18%）	20 人（53%）	4 人（11%）	7 人（18%）

イ　アンケートの結果（生徒数 38 名）

質問項目	あてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
①あなたは資料を活用して考察することができましたか。	7 人 (18%)	22 人 (58%)	9 人 (24%)	0 人 (0%)
②あなたは根拠を挙げて判断をすることができましたか。	4 人 (11%)	26 人 (68%)	8 人 (21%)	0 人 (0%)
③あなたは自分の言葉で表現をすることができましたか。	2 人 (5%)	19 人 (50%)	17 人 (45%)	0 人 (0%)
④あなたは評価を提示されたことで意欲的に学習することができましたか。	15 人 (39%)	16 人 (42%)	6 人 (16%)	1 人 (3%)

ウ　仮説の検証

(ｱ)　仮説１の検証

本授業では資料１(空間軸)から、たもとを分かつ以前の政府は、薩摩・長州・土佐・肥前の出身者で占められていたことを読み取り、資料２(時間軸)から、征韓派の人々は下野して新政府とはたもとを分かつことを読み取った上で、岩倉使節団の帰国以後、使節団の

メンバーを中心とする内治優先派と、留守政府を中心とする征韓派との間で対立が生じたこと(自らの知識)と関連付けて考察・判断し、表現する活動を取り入れた。その際、解答欄に記入する前に箇条書きをさせるなどの指導を行った結果、ルーブリックによる評価結果ではＡ評価が７名（18%)、Ｂ評価が 20 名（53%）となり、約７割の生徒が思考力・判断力・表現力等を育むことができた。

(ｲ)　仮説２の検証

アンケート④で、８割以上の生徒が「あてはまる」と「だいたいあてはまる」と答え、学習意欲の高まりを感じたことが分かる。評価規準を理解した生徒にとっては何を表現する必要があるのか明確になり、より高い評価を目指すきっかけとなったと言える。

(ｳ)　仮説３の検証

今回のワークシートの分析から評価規準を活用し、個々の生徒の学習到達状況を把握するとともに、資料の選別や提示の仕方の工夫など授業の改善点が明確になった。今回のような取組を繰り返すことで、ルーブリックを活用した授業を更に充実させ、思考力・判断力・表現力等を育むことにつながると考える。授業者自身も到達させるべき目標が明確になり、その精度を高めて授業改善につなげることができた。

エ　成果と課題

(ｱ)　成果

仮説２の検証から８割以上の生徒が、学習意欲の高まりを感じたことが分かる。授業の開始時に学習目標や評価基準を提示し、授業者と生徒がそれらを共有して同じ方向に進むことで授業の活性化につながることが分かった。また、仮説１の検証から自らの知識と当日提示された資料を関連付けるよう繰り返し指導し、スモールステップを踏まえ思考・判断させて論理的に表現させた結果、７割以上の生徒がＢ以上の評価となった。この方法が生徒の思考力・判断力・表現力等を育むことにつながったといえる。また、Ｃ・Ｄ評価の生徒については、自らの知識と関連付けが不十分であったことや、資料を十分活用しきれなかったなどの問題点や克服すべき課題が明確になり、その後の指導方針を正確に立てることができる。

(ｲ)　課題(授業改善に向けて)

生徒の感想でワークシートに記述する時間が足りなかったという意見が多数あった。生徒にじっくり思考・判断させ、記述させる時間を確保するためにも資料の精選やポイントを絞ったワークシートの作成などの準備が必要である。また、ルーブリックの評価基準を授業開始後すぐにＩＣＴ機器で提示して説明をしたが、常時掲示していなかったため、評価基準を忘れてしまう生徒が多数いた。そのため、授業中は常に提示するよう、あらかじめワークシートに印刷するか、模造紙などにルーブリックの評価基準を印刷して黒板に貼っておくなどの工夫が必要である。

4 実践事例Ⅲ　地理

教科名	地理歴史	科目名	地理Ａ	学年	第１学年

(1)　単元(題材)名、使用教材(教科書、副教材)

ア　単元名　　サハラ以南のアフリカの発展に必要なことは何だろうか

イ　使用教材　『新地理Ａ』(帝国書院)『高等地図帳』(二宮書店)
　　『世界の諸地域 NOW2014』(帝国書院)

(2)　単元の指導目標

ア　サハラ以南のアフリカに見られる自然環境や人々の営みについて関心をもち、世界を構成する多様な地域の一つとしての見方・考え方を育成する。

イ　サハラ以南のアフリカで生じている諸事象を捉えるための諸資料から読み取った内容をもとに、なぜそのような事象が生じているのかを、自らの知識と関連付けて考察し、自分の考えを表現できるようにする。

ウ　世界的視野に立ってサハラ以南のアフリカという地域の特徴や課題を捉え、当該地域の将来の在り方について考えさせる。

(3)　単元の評価規準

ア　関心・意欲・態度	イ　思考・判断・表現	ウ　資料活用の技能	エ　知識・理解
・サハラ以南のアフリカに見られる自然環境や人々の営みについて関心をもち、自分とは異なる人々や地域について理解し、考えようとしている。	・サハラ以南のアフリカで生じている事象について、諸資料から読み取れた内容を空間軸と時間軸の視点から考察し、なぜそれらが生じているのかについて自分の考えを表現できる。	・様々な図表から有用な情報を読み取ったり、必要な情報を自ら収集したりしている。	・サハラ以南のアフリカについて、自然環境の特徴や人々の営み築いた生活との関わりなどを理解し、その知識を身に付けている。

(4)　単元（題材）の指導と評価の計画（３時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点 関	思	技	知	評価規準（評価方法など）
	【基軸となる問い】サハラ以南のアフリカの発展に必要なことは何だろうか。					
第一次	【ねらい】サハラ以南のアフリカの自然環境の多様性と、そこで生きる人々の営みの多様性や合理性について理解する。					
	【小さな問い】サハラ以南のアフリカではどのような生活が営まれているのだろうか。					
	・中部アフリカ諸国を事例に、サハラ以南のアフリカの低緯度熱帯地域に見られる自然環境や、その自然と関わりながら形成された人々の営みについて理解する。				●	・中部アフリカ諸国の自然環境の特徴をつかみ、そのような環境である理由や自然と関わりながら作り上げられてきた人々の営みについて理解している。(発問・ワークシート記述)
	・カラハリ砂漠を舞台に、回帰線下の乾燥アフリカに見られる自然環境や、その自然と関わりながら形成された人々の営みについて理解する。				●	・カラハリ砂漠の自然環境の特徴をつかみ、そのような環境である理由や自然と関わりながら作り上げられてきた人々の営みについて理解している。(発問・ワークシート記述)
	・南アフリカ共和国を事例に、サハラ以南のアフリカの高緯度地域に見られる自然環境や、その自然と関わりながら形成された人々の営みについて理解する。				●	・南アフリカ共和国の自然環境の特徴をつかみ、そのような環境である理由や自然と関わりながら作り上げられてきた人々の営みについて理解している。(発問・ワークシート記述)

第二次（本時）	【ねらい】自然環境や歴史的背景を踏まえて、ケニアの農業を理解する。また、諸資料の読み取りを通じて、世界の他地域との結び付きの変化とともにケニアの農業も変化していることに着目し、地域の変容に関わる諸要素を捉えられるようにする。 【小さな問い】ケニアの農業は、近年なぜ変化したのだろうか。					
	・ケニアの自然環境と歴史的背景に着目し、諸資料を活用してケニアの農業の特徴について理解する。 ・植民地化で始められた茶の生産から国際際輸送網の発達で発展した現代の切り花産業まで、ケニアの農業が他地域との結び付きの変容とともに変化してきた様子を諸資料から読み取り、自分の言葉で表現する。		●	●		・ケニアの自然環境や歴史的背景に関する諸資料を読み取り、ケニアの農業の特徴について理解している。（ワークシート記述） ・諸資料から読み取ったことや既習事項、自らの知識を踏まえて、ケニア農業の変化の一つとして、切り花産業の発展の背景に着目し、時間軸・空間軸に基づいて考察を加え、自分の考えをまとめ、表現している。（ワークシート記述）
第三次	【ねらい】諸資料から、サハラ以南のアフリカの発展を困難にしている諸課題を見出し、自然環境を含めた持続可能な発展の在り方について考察する。 【小さな問い】サハラ以南のアフリカは、なぜ世界の低開発地域となっているのだろうか。					
	・農作物などの一次産品について、国際価格の変動を表す資料を読み取りながら、モノカルチャー経済の欠点について理解する。 ・産地周辺の人口の変化や宅地の拡大、農業用水や生活用水を供給する湖の水位変動などの資料を読み取りながら、産業の発展と自然環境の保全が表裏の関係にあることを理解する。 ・フェアトレードや環境認証制度について理解し、サハラ以南のアフリカの発展に向けた自分の考えをまとめる。		●	● ● ●		・諸資料から、一次産品の価格変動が激しいことと、それにより安定した生計を立てることが難しい側面を読み取っている。（発問・ワークシート記述） ・自然環境の変容について表した諸資料から、それが産業の発展に伴って生じていることを読み取っている。（発問・ワークシート記述） ・サハラ以南のアフリカの発展に向けた自分の考えをもっている。（発問・ワークシート記述）

(5)　本時（全３時間中の２時間目）

ア　本時の目標

サハラ以南のアフリカの国としてケニアを取り上げ、ケニアの農業の特徴や近年の変化について、その根拠となる諸資料を読み取り、地域の歴史的背景（時間軸）と、世界の他地域との結び付き方の変化に着目（空間軸）して考察し、自分の考えを表現する。

イ　本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法 （ア～エ）
導入	15分	・サハラ以南のアフリカの国の一つとしてケニアを取り上げ、ケニアに見られる自然環境や人々の営みについて概観する。	・本時の目標や、ルーブリックによる評価基準を示し、生徒の学習に向けた動機付けを行う。	・本時の目的を理解し、意欲的に課題に取り組む姿勢をもっている。（ア・観察・机間指導）
展開	25分	発問１「ケニアはどのような農業国か。」 ・ケニアが茶を中心としたプランテーション農業を行ってきたことについて、資料１～４から読み取った内容を言葉でまとめる。 発問２「ケニアの農業は近年なぜ変化したのか。」 ・流通の新しい拠点ができたことが、切り花の産地であるケニアの農業を変えていることについて、資料５・６から読み取った内容や自らの知識を踏まえて、時間軸・空間軸に基づいて考察し、言葉でまとめる。	・生徒の取組状況を把握し、机間指導を行う。 ・生徒の取組状況を把握し、机間指導を行う。	・ケニアの主要な輸出品や農産物の品目別生産の伸び等の資料から、ケニアがどのような農業国であるかについて考えをまとめている。（ウ・ワークシート記述） ・ケニアを取り巻く航空路線網や、国際的な流通拠点に関する諸資料を読み取り、自らの知識と関連付けて考察し、自分の考えをまとめ、表現している。（イ・ワークシート記述）

まとめ	10分	・ワークシートを提出して本時の諸資料の着目点についての説明を聞く。 ・本時の学習について、アンケートに記入しながら振り返る。	・諸資料を読み取る際の着目点や、読み取った内容同士がどのように関連付けられるか解説する。 ・アンケートを通じて、到達すべき目標に近づいていることを確認させる。	・本時の理解度や自身の取組について自己評価している。(ア・アンケート記述)

ウ　評価の実際

評価規準	評価基準			
	A （十分満足できる）	B （概ね満足できる）	C （努力を要する）	D （特に努力を要する）
ケニアを取り巻く航空路線網や、国際的な流通拠点に関する諸資料を読み取り、自らの知識と関連付けて考察し、自らの考えをまとめ、表現することができている。	ケニアのナイロビを出発する主要な航空路線や各路線の週当たり便数（空間軸）とナイロビ線をもつドバイを拠点とする航空会社の、近年の就航都市拡大とドバイ空港自体の施設拡充を表した年表（時間軸）の諸資料と自らの知識を関連付け、ケニアの切り花産業の発展の背景について自らの考えをまとめ、表現することができている。	ケニアのナイロビを出発する主要な航空路線や各路線の週当たり便数（空間軸）又はナイロビ線をもつドバイを拠点とする航空会社の、近年の就航都市拡大とドバイ空港自体の施設拡充を表した年表（時間軸）の資料と自らの知識を関連付け、ケニアの切り花産業の近年の発展の背景について自らの考えをまとめ、表現することができている。	ケニアのナイロビを出発する主要な航空路線や各路線の週当たり便数（空間軸）とナイロビ線をもつドバイを拠点とする航空会社の、近年の就航都市拡大とドバイ空港自体の施設拡充を表した年表（時間軸）の諸資料を基に、ケニアの切り花産業の近年の発展の背景について自らの考えをまとめ、表現することができている。	ケニアのナイロビを出発する主要な航空路線や各路線の週当たり便数（空間軸）又はナイロビ線をもつドバイを拠点とする航空会社の、近年の就航都市拡大とドバイ空港自体の施設拡充を表した年表（時間軸）の資料を基に、ケニアの切り花産業の近年の発展の背景について自らの考えをまとめ、表現することができている。

(6)　問いの設定理由

本単元はサハラ以南のアフリカについて、「サハラ以南のアフリカの発展に必要なことは何だろうか」という基軸となる問いを設定し、本時では「ケニアの農業は、近年なぜ変化したのだろうか」という小さな問いを設定した。サハラ以南のアフリカは世界の中でも低開発地域であるが、単元全体では「なぜ」そうなのかを考察させるとともに、サハラ以南のアフリカが発展するにはどうしたらよいのか、何が必要なのかへと考えを深めていく。本時ではケニアの農業を取り上げ、近年生じている変化とその背景となっていることについて考えさせることで、地域が変化する諸要素を見いだし、地域が変化することを多角的に捉えることできる。

資料は「ケニアのナイロビを出発する主要な航空路線と、各路線の週当たり便数」(空間軸)、「ナイロビ線をもつドバイを拠点とする航空会社の、近年の就航都市拡大とドバイ空港自体の施設拡充を表した年表」(時間軸) である。ケニアでは植民地化以降定着したプランテーション農業が行われており、なかでも茶は主要な輸出品となってきた。こうしたケニアの農業に切り花産業の成長という変化が近年見られるようになった。生徒は「ペルシャ湾岸諸国の発展とハブ空港化の進展」を自らの知識として活用し、ケニアで切り花産業が成長した背景について自らの考えをまとめ、表現する。

(7)　本時の振り返り

ア　ルーブリックによる評価結果（生徒数 40 名）

A（十分満足できる）	B（概ね満足できる）	C（努力を要する）	D（特に努力を要する）
5 人（12.5%）	20 人（50%）	15 人（37.5%）	0 人（0 %）

イ　アンケートの結果（生徒数 40 名）

質問項目	あてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
①あなたは資料を活用して考察することができましたか。	18 人 (45%)	21 人 (52.5%)	１人 (2.5%)	０人 (０%)
②あなたは根拠を挙げて判断をすることができましたか。	13 人 (32.5%)	24 人 (60%)	３人 (7.5%)	０人 (０%)
③あなたは自分の言葉で表現をすることができましたか。	10 人 (25%)	25 人 (62.5%)	５人 (12.5%)	０人 (０%)
④あなたは評価を提示されたことで意欲的に学習することができましたか。	14 人 (35%)	21 人 (52.5%)	５人 (12.5%)	０人 (０%)

ウ　仮説の検証

(ｱ)　仮説１の検証

アンケート①・②について、「あてはまる」「だいたいあてはまる」と答えた生徒が 39 人（97.5%）、37 人（92.5%）と、多くの生徒が思考・判断の場面でそれに取り組めたと評価をしていた。また、生徒からは「普段よりも深く考えた」や、「複数の資料から何が言えそうかを考えることが面白かった」などの感想があった。

(ｲ)　仮説２の検証

アンケート④は、「あてはまる」「だいたいあてはまる」で 35 人（87.5%）と、ルーブリックによる評価基準が提示されたことで多くの生徒が学習に前向きに取り組めたことが分かる。

(ｳ)　仮説３の検証

ルーブリックによる評価結果はＡとＢで 25 人（62.5%）と、クラスの過半数の生徒が満足できるものだったが、Ｃの生徒も 15 人（37.5%）と少なくなかった。Ｃの生徒は、各資料から読み取れることを複数書き出せてはいても、それらを結び付け、論理的な答えとして表現できず、また自らの知識と関連付けて答えられていなかった。

エ　成果と課題

(ｱ)　成果

仮説１～３の検証から、諸資料と、それと正対した問いを設定した授業が、生徒の思考力・判断力・表現力等を育み、また、評価にルーブリックを用いることが生徒の学習意欲を喚起するのに効果的であることが分かった。

(ｲ)　課題（授業改善に向けて）

改善点の一つは、授業の中で授業者が活用できる知識を生徒に意識させる場面を設けることである。ルーブリックは諸資料から読み取ったことと自らの知識を関連付けて答えることを挙げており、このことの有無が評価のＢ以上と以下の分かれ目となっている。具体的には授業者が使える知識をキーワードとして提示したり、既習事項であればノートを開かせたりすることを挙げる。これは、今まで積み重ねてきた知識が意味のあるもので、問いに答える一助となることを生徒が実感できる場面としても重要であろう。もう一つの改善点は、ルーブリックの提示及び説明の仕方である。何が評価の分かれ目となるのか、Ａ～Ｄの段階について丁寧に説明するとともに、生徒のワークシートに掲載するなどして常に参照できるようにすれば、より生徒も意識的に取り組めると考える。

5 実践事例Ⅳ　江戸から東京へ

教科名	地理歴史	科目名	江戸から東京へ	学年	第3学年

(1)　単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア　単元名　　江戸幕府の滅亡

イ　使用教材　『江戸から東京へ』（東京都教育委員会）

(2)　単元（題材）の指導目標

ア　幕末の社会や経済の変化から、江戸幕府衰退の過程について、政治的対立や国際情勢を関連付けて考察させる。

(3)　単元の評価基準

ア　関心・意欲・態度	イ　思考・判断・表現	ウ　資料活用の技能	エ　知識・理解
・幕末における近代国家の形成と社会や文化の特色に対する関心と課題意識を高め、意欲的に追究している。	・幕末における近代国家の形成と社会や文化の特色から課題を見いだし、国際環境と関連付けて多面的・多角的に考察するとともに、国際社会の変化を踏まえて公正に判断して、その過程や結果を適切に表現している。	・幕末における近代国家の形成と社会や文化の特色に関する諸資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめたりしている。	・幕末における近代国家の形成と社会や文化の特色についての基本的な事柄を、国際環境と関連付けて総合的に理解し、その知識を身に付けている。

(4)　単元（題材）の指導と評価の計画（４時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点 関	思	技	知	評価規準（評価方法など）
【基軸となる問い】なぜ江戸幕府は滅亡したのだろう。						
第一次	【ねらい】安政の大獄と桜田門外の変を通して、将軍継嗣問題や開国派と尊攘派の対立を考察させる。 【小さな問い】井伊直弼はなぜ暗殺されたのだろう。 ・日米修好通商条約の不平等な内容を資料から読み取り、幕府が不平等な条約を締結した理由を考える。 ・安政の大獄と桜田門外の変を通して、開国派と尊攘派の主張を資料から読み取り考察する。		●	●		・日米修好通商条約の資料の内容を読み取っている。（ワークシート記述） ・安政の大獄と桜田門外の変の資料を通して、開国派と尊攘派の主張を読み取り、考察している。（ワークシート記述）
第二次（本時）	【ねらい】諸資料を活用して開国後の貿易の特徴を読み取らせ、国内の経済にどのような影響を与えたのか考察させる。 【小さな問い】開国後の貿易は、江戸の経済にどう影響したのだろう。 ・八王子と横浜を結ぶ「絹の道」について関心をもつ。 ・幕末開国後の貿易について、資料から主要輸出入品目や年表等を読み取り、国内の経済に与えた影響について考察する。	●	●			・開国後の貿易について、関心をもち、意欲的に探究している。（机間指導） ・各資料から八王子の繁栄理由と、江戸の経済が混乱し、幕府の権威が失墜した理由を、自らの考えをまとめて表現している。（ワークシート記述）

第三次	【ねらい】尊王攘夷派の活動により、幕府の権威に対し朝廷の権威が高まったことを理解させる。 【小さな問い】尊王攘夷はどのように展開していったのだろう。 ・新撰組の中心人物である近藤勇や土方歳三について調べ、彼らの経歴や当時の社会情勢に関心をもつ。 ・八月十八日の政変や池田屋事件、禁門の変、第一次長州征伐について整理し、幕府と尊王攘夷派との一連の対立や新撰組の存在意義を理解する。	●			●	・新撰組が組織された背景について考え、幕府と尊王攘夷派との対立に対する関心と、課題意識を高めている。（ア・ワークシート記述） ・幕府による尊王攘夷派への弾圧の流れと、大打撃を受けた尊王攘夷派が討幕へ動き始めたことを理解している。（ワークシート記述・テスト）
第四次	【ねらい】討幕運動の展開と、幕府滅亡までの一連の流れを理解させる。 【小さな問い】慶喜の行った大政奉還は、幕府や倒幕派にどう影響を与えたのだろう。 ・上野戦争の資料から、上野でなぜこれほどの激戦が起きたのかについて関心を高める。 ・山内豊信が提出した建白書の資料を読み取り理解する。小御所会議を機に戊辰戦争が起こり、江戸城無血開城により上野が戦いの場となったことを理解する。	●			●	・上野戦争について考え、幕府の滅亡について関心と課題意識を高めている。（ワークシート記述） ・山内豊信が提出した建白書の資料を読み取るとともに、大政奉還や小御所会議によって新政府での主導権がほぼ決まり、幕府が滅亡したことを理解している。（ワークシート記述・テスト）

(5)　本時（全４時間中の２時間目）

ア　本時の目標

(ア)　諸資料を活用して開国後の貿易の特徴を読み取らせ、国内の経済にどのような影響を与えたのか考察させる。

イ　本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法（ア～エ）
導入	15分	・「江戸から東京へ」P.46の「学びの窓」から八王子鑓水にある、幕末の商人の屋敷跡の写真を見て、その特徴を考察する。	・グループを作り、分からない場合には話し合いをさせ、またノート・教科書等の参照をさせる。 ・ＩＣＴ機器の利用で生徒の興味・関心を高める。	・本時の目的を理解し、意欲的に課題に取り組む姿勢をもっている。（ア・机間指導）
展開	30分	・写真と地図を見ながら、八王子から絹の道を通って横浜に生糸を持ち込んだことを読み取る。 ・グラフと年表を見ながら、生糸が輸出品目の主要産業であったこと、生糸が国内に不足し値段が急騰したことで、国内の経済が混乱したことを読み取る。 ・ワークシートに考えたことをまとめる。 発問「開国後の貿易は、江戸の経済にどう影響したのだろう。」 ・グラフと地図から、開国後の貿易は、江戸の経済にどう影響したのかを、自分の考えをまとめて、ワークシートに記入する。	・ワークシート配布、ルーブリックを説明し、目標をもって意欲的に授業に取り組ませる。 ・ノートを見たり、グループワーク活動を活用したりして、自分の考えを深めさせる。 ・地図やグラフ、年表を参考にしながら開国後の貿易について、①八王子から絹の道を通って生糸を運んでいたこと②生糸が主要輸出品目だったことや幕府の政策、一揆が起こったことを導き出せるよう、適宜指導する。	・諸資料から八王子の繁栄理由と、江戸の経済が混乱し、幕府の権威が失墜した理由を、自らの知識と関連付けて考察し、自分の考えをまとめ、表現している。（イ・ワークシート記述）
まとめ	5分	・クラスの生徒の発表を聞き、自分のまとめたことを再考察する。 ・本時の学習について、アンケートに記入して振り返る。	・数名に発表させ、生徒に再考察させる。 ・本時の取組を自己評価させる。	・本時の取組について自己評価している。（ア・アンケート記述）

ウ　評価の実際

評価規準	評価基準			
	A （十分満足できる）	B （概ね満足できる）	C （努力を要する）	D （特に努力を要する）
八王子の繁栄と、江戸の経済が混乱し、幕府の権威が失墜したことについての諸資料を読み取り、自らの知識と関連付けて考察し、自らの考えをまとめ、表現している。	八王子の繁栄（空間軸）と貿易後の経済混乱（時間軸）の諸資料と自らの知識とを関連付け、開国後の貿易が国内の経済にどのような影響を与えたのかについて、根拠を明示した上で自らの考えをまとめ、表現することができている。	八王子の繁栄（空間軸）又は貿易後の経済混乱（時間軸）のどちらかの資料と自らの知識とを関連付け、開国後の貿易が国内の経済にどのような影響を与えたのかについて、根拠を明示した上で自らの考えをまとめ、表現することができている。	八王子の繁栄（空間軸）と、貿易後の経済混乱（時間軸）の諸資料から、開国後の貿易が国内の経済にどのような影響を与えたのかについて、自らの考えをまとめ、表現することができている。	八王子の繁栄（空間軸）又は貿易後の経済混乱（時間軸）のどちらかの資料から、開国後の貿易が国内の経済にどのような影響を与えたのかについて、自らの考えをまとめ、表現することができている。

(6)　問いの設定理由

本単元は、開国から尊王攘夷運動や討幕運動などの動きを経て明治維新に至った過程を考察させる。その際、「なぜ江戸幕府は滅亡したのだろう」という基軸となる問いを設定し、幕府が滅亡し政治の実権が新政府へと移り変わっていく過程を、時間軸・空間軸を重視した資料を活用させ多角的に考察させながら歴史的思考力を育んでいく。本時は「開国後の貿易は、江戸の経済にどう影響したのだろう」という問いを設定し、生糸の流通における八王子や横浜の地図を空間軸、主要輸出品目の資料や年表を時間軸とした。これらの資料から「八王子の商人は貿易によって大きな利益を得た」ことや「貿易が江戸の人々の暮らしを困窮させ、一揆や打ちこわしが起こった」ことを自らの知識を用いて思考・判断させる。そして、基軸となる問いである「なぜ江戸幕府は滅亡したのだろう」と関連させて「幕府の権威が失墜した」ことを表現できるよう指導する。

(7)　本時の振り返り

ア　ルーブリックによる評価結果（生徒数 36 名）

A（十分満足できる）	B（概ね満足できる）	C（努力を要する）	D（特に努力を要する）
4 人（11%）	16 人（45%）	15 人（42%）	1 人（２%）

イ　アンケートの結果（生徒数３６名）

質問項目	あてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
①あなたは資料を活用して考察することができましたか。	12 人 (33%)	18 人 (50%)	6 人 (17%)	0 人 (０%)
②あなたは根拠を挙げて判断をすることができましたか。	4 人 (11%)	18 人 (50%)	11 人 (30%)	3 人 (９%)
③あなたは自分の言葉で表現をすることができましたか。	8 人 (22%)	20 人 (56%)	6 人 (17%)	2 人 (５%)
④あなたは評価を提示されたことで意欲的に学習することができましたか。	9 人 (25%)	17 人 (47%)	10 人 (28%)	0 人 (０%)

ウ　仮説の検証

(ｱ)　仮説１の検証

本授業では問１（空間軸に関する資料）と問２（時間軸に関する資料）を読み取った上で、

自らの知識(既に学習した内容)、つまり「最大の貿易港は横浜だったこと」「五品江戸廻送令は効果がなかったこと」と、基軸となる問いである「なぜ江戸幕府は滅亡したのだろう」を関連させて考察・判断させ、「幕府の権威が失墜した」ことを表現できるよう指導した。その際、スモールステップを意識して、まず各資料の読み取りを箇条書きで表現させ、本時の問いで文章により論理的に表現できるよう指導を行った。その結果、A評価が４名(11%)、B評価が 16 名(45%)となり、多くの生徒の思考力・判断力・表現力等を育むことができた。

(ｲ)　仮説２の検証

ルーブリックを用いて目標を明確にした結果、授業アンケートでは「あなたは評価を提示されたことで意欲的に学習することができましたか。」では「あてはまる」が９人（全体の 25%)、「だいたいあてはまる」が 17 人（全体の 47%）と、クラスの７割以上の生徒が、学習意欲の高まりを感じたことがわかった。また、ワークシートも意欲的に取り組み自分の考えを積極的に表現しているのが分かった。

(ｳ)　仮説３の検証

ワークシートによる評価結果の分析から、資料を適切に読み取っているか、授業の内容を理解しているか、今までの授業と関連させて考察しているかを文章によって表現させることで、学習到達の状況を把握することができた。このこととアンケートの結果から、ルーブリックや時間軸・空間軸を用いた学習の必要性と方向性が示された。また、ルーブリックによる評価基準でC・Dと評価された生徒のワークシートや、アンケートで成果が得られなかった生徒の意見から課題が見え、指導の改善点を把握することもできた。

エ　成果と課題

(ｱ)　成果

仮説の検証からも分かるが、ルーブリックを活用し生徒の目標を明確にした結果、学習意欲が向上した。また、時間軸・空間軸を重視した諸資料を活用して、思考力・判断力・表現力等を育むこともできた。さらに、ルーブリックの評価がC・Dであった生徒は、資料の読み取りや自らの知識と関連付けが不十分であったことなど課題が明確化し、教員側もその後の指導方針を立てやすくなった。

(ｲ)　課題(授業改善に向けて)

仮説１の検証において、空間軸・時間軸を重視した資料収集・作成に苦労したが、問題を作成するに当たって生徒の考察は十分であったかは疑問が残った。そのためにも、今後は「基軸となる問い」と「小さな問い」の整合性をより意識して、問題作成に取り組む必要がある。仮説２の検証においては、ルーブリックによる評価基準の語句が理解できず、意欲的に取り組むことに課題があった生徒が数名いた。また、日頃からグループ学習が中心に授業を行っているという実態からグループでの学習活動を主に展開したが、本当に「自らの知識」なのか判断できないことが課題となった。今後、評価基準や評価方法をより明確にしつつ、生徒の実態に即した授業を展開していきたい。

Ⅶ　研究の成果

本部会では、時間軸・空間軸を重視した諸資料を読み取らせ、それを活用して指導と評価の工夫改善に取り組んだ。

時間軸・空間軸を重視した諸資料を精選して生徒に提示し、その資料に基づいて思考力・判断力・表現力等を育成するための適切な問いを設定し授業を展開したことについて、生徒のワークシートの内容や授業で実施したアンケートから、生徒の学習活動は充実し、思考力・判断力・表現力等を育成することができたと考えられる。また、ルーブリックの評価基準を生徒に提示したことについて、いずれの検証授業においても７割以上の生徒が「意欲的に学習することができた」と回答しており、その授業で到達すべき目標を明示することが生徒の学習活動に一定の指針を与え、主体的に授業に取り組む姿勢に結び付いたと考えられる。

本部会が活用したルーブリックの評価基準に基づいた評価を行うことにより、生徒の思考力・判断力・表現力等を育成するに当たり、知識の定着に課題があるのか、資料を読み取ることができていないのかなど、生徒一人一人について把握することが可能になった。さらに、ルーブリックの評価基準でＤに相当する生徒については、ワークシートの記入状況からその把握が容易であり、個に応じた指導を進めやすくなった。

指導と評価の改善においては、評価基準や資料の提示の仕方、設定した「問い」の適切さなどが生徒の学習への取組と評価基準に対する達成度に確実に反映されるため、今後の授業改善のための具体的方策を立てられることとなった。

Ⅷ　今後の課題

今年度の本部会では思考力・判断力・表現力等の育成のためにルーブリックの評価基準に「諸資料から読み取れた内容と自らの知識を関連付け」という要素を導入した。これは昨年度の本部会における「諸資料から得た情報と、自らの知識や既習事項を関連付け、考えをまとめる力」という判断力の定義を踏まえてのことであるが、話し合いや教科書・資料集を参照して得た知識又は類推した知識は「自らの知識」に相当するのかなど、「自らの知識」の定義を確定しきれなかった点は、今後に向けての課題である。

また、ルーブリックを活用した評価結果を分析し、生徒の学習到達度を把握して、指導の改善の具体的な方策を検討するまでは至ったが、実際に授業改善ができるところまでは検証できていない。ルーブリックの評価基準を活用することは有効であるが、授業がどれほど準備されているかにより、効果の程度は大きく異なる。更に指導と評価の工夫改善を充実させ、学習を生徒にとってより高次のものとするためには、継続的に実践し事例を蓄積していく必要がある。

今年度、本部会は生徒の思考力・判断力・表現力等を育成する指導の前提となる「問い」に重点をおいて検証授業を実施したが、単元全体を貫く「基軸となる問い」と１時間ごとの「小さな問い」との整合性や、問いと資料との整合性について、検討が不十分な点もあった。設定する「問い」の重要性は生徒の授業での取り組む姿勢や学力向上に直結するものだけに、今後更に研究・検討する必要がある。

平成２６年度　教育研究員名簿

高　等　学　校　・　地　理　歴　史

学　校　名	課程	職名	氏名
都立板橋有徳高等学校	全日制	教　諭	奥村　翔二
都立文京高等学校	全日制	教　諭	金田　亜妃子
都立羽村高等学校	全日制	教　諭	○佐々木　彬人
都立八王子拓真高等学校	定時制	教　諭	須藤　祐介
都立調布北高等学校	全日制	教　諭	相馬　さくら
都立武蔵丘高等学校	全日制	教　諭	◎土屋　斎嘉
都立片倉高等学校	全日制	教　諭	南濱　隆宏
都立砂川高等学校	通信制	教　諭	山本　武蔵
都立立川高等学校	定時制	教　諭	渡邊　貴浩

◎　世話人　○　副世話人

〔担当〕　東京都教育庁指導部高等学校教育指導課統括指導主事　小林　正人
東京都教育庁指導部高等学校教育指導課課務担当係長　三藤　政義

平成２６年度
教育研究員研究報告書

高等学校・地理歴史

東京都教育委員会印刷物登録
（平成２６年度第１８６号
平成２７年３月）

編集・発行　東京都教育庁指導部指導企画課
所　在　地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　（０３）５３２０－６８４９
印刷会社　正和商事株式会社

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。